Saving Tropical Forests

ウータン

HUTAN Group

133

森の通信

2019.6.25

熱帯林を破壊するパーム油発電にNO！大手旅行会社H.I.S.の前でバナーアクション

CONTENTS

・People（51）ウォン・メン・チュウ氏 ……p 3
・パーム油発電に関する学習会報告等……p 4〜7
・新会員の声 ……p 8
・総会の報告、決算・予算報告……p 9〜11
・タンジュン・プティン訪問報告 ……p 12〜13
・セコニャール青年団訪日の記録……p 14〜16
・世界の森林ニュースから……p 17
・イノさんの気まぐれ読書案内……p 18

✓ パーム油学習会の参加者から、各地のパーム油発電の事例を紹介いただいた。その後、地域の住民を苦しめ、熱帯林破壊につながるパーム油発電を何とかしようという実際のアクションが始まろうとしている。学習会は13回を数え、「気づき→学び→行動」の流れが見えてきた。継続は力なり。

✓ ボルネオ島の東カリマンタン(インドネシア)では石炭開発が進み、貴重な熱帯林が失われている。ウータンでもゲストとして日本に呼び、森林火災の話をしてくれたリヌスはCOPを辞め、先住民が暮らすムラサ村の村人たちと新しい団体CAN Borneoを立ち上げた。大規模開発に頼らないアグロフォレストリーの実践と開発に対するキャンペーンを柱にコミュニティと共に森を守ろうとする姿に、かつてのバスキを重ね合わせる。いま支援が大事！ (事務局長・石崎雄一郎)

●ご支援のお願い●

会報誌前号p.14の「東カリマンタン報告」でご紹介したCAN Borneo(Conservation Action Network Borneo)は、オランウータン保護NGOのCOPで長く活動していたリヌスさんが、先住民の村人と共に立ち上げた環境保全団体。村の中を流れる豊かで素晴らしい景色のクレイ川沿いの森は、石炭採掘企業の事業権のエリアとなっています。リヌスさんはこれまでの経験を生かした手腕によるキャンペーン活動で開発を食い止め、村人たちと森づくりのための果樹園を実現するためにファンディングを求めています。地域住民を中心とした草の根団体の立ち上げを支えることこそがウータンの使命と考え、賛同者からのカンパを募っています！

- **ご支援の方法：**
  同封の振込用紙の「CAN Borneo支援」を選んでお振込下さい
- **CAN Borneoの詳しい活動内容などは以下をご覧下さい**
  (英語になります)
  ➡ http://www.canborneo.id/
  ➡ https://www.facebook.com/canborneo/

・・・・・・・・・・・・・・【ウータン活動記録】・・・・・・

4/24 立命館大学 現代環境論 木原先生 ゲスト講師(いっしー)
4/25 消費から持続可能な社会をつくる市民ネットワーク会議(いっしー、Yucco)
5/12 Global Landscapes Forum in Kyoto参加(いっしー、missy)
5/13 京都府福知山市パーム油発電所の問題視察(飯沼さん、missy)
6/1 第13回パーム油学習会「パーム油発電は本当に"再生可能"なエネルギーなのか？」
6/3 関西学院大学 経済学部 松岡先生 ゲスト講師(いっしー)
6/7 関西学院大学 商学部 教養基礎G(環境) Gyroさん ゲスト講師(いっしー)
6/9 ウータン総会
6/12 桃山学院大学 経済学部 風岡さん ゲスト講師(いっしー)
6/13 常盤会学園大学 新堀さん ゲスト講師(いっしー)
6/14「森のある惑星」ミーティング
6/14 京都産業大学 在間先生 ゲスト講師(いっしー)
6/15 スタディツアー合同説明会(いっしー、直輝くん、ちえちゃん、まよちゃん)
6/21 関西学院大学 商学部 教養基礎G(環境) Gyroさん ゲスト講師 (missy)

People (51) ウォン・メン・チュウ(Wong Meng Chuo)氏

=地味でも知力の人・サラワクの先住民を支援し続けるマレーシアの活動家=

私の手元に１冊のメン・チュウ氏が編集した冊子がある。それは1980代から森林破壊に苦しむサラワク奥地で生活するプナン人の各地のコミュニティの生活領域についてまとめたものだ。伐採と土地開発で多くの先住民が厳しい状態に晒されていた。

プナン人は昔から狩猟・採集生活で共同体として暮らしていたので、土地の概念がほぼなかったという。2000年始めも狩猟・採集の移動のプナン人が約200-400人いると。所有権概念がない先住民達を知って、タイブ元サラワク首相は次々と木材企業に伐採権を与えた。当然、タイブ氏の親戚企業にも多くの伐採地域を与えた。伐採許可を知らない生活苦が続く多くの先住民は1987年に立ち上る。州政府に伐採停止を頼んだが断られ、約100箇所の伐採道路を封鎖。その後苦しいプナン・コミュニティをメン･チュウ氏が調べて印刷し、世界に知らせた。地味でも継続して知らしめることは大切だ。

1997年にK氏と一緒にメン・チュウ氏のシブ市内の事務所を訪れ、先住民の情報を聞いた。次にメン・チュウ氏と会ったのは「2005アースデイ大阪」の講演者としてで、3名のゲストが我が家に宿泊。この度、車椅子で来日すると連絡があった。私ならその状態で海外へ行く意志にならない。京都での国際会議、東京集会を含め多分最後(?)の日本訪問になる可能性があり、石崎事務局長と私が関空で出迎える。大阪でのウータン主催のパーム油学習会にも参加下さり、少しのアドバイスを頂いた。

たまたま京都での世界パーキンソン会議でケアする人がいないから１日、私は彼と同行した。まず彼は私にシブ市で活動するパーキンソン病の方を支援するポスターの所へ案内する。そして友人達と話した。人間は「水が一番大事だ」と。きれいな水が新陳代謝になる。汚れたものを出し入れ替える。水は薬より大事だ。「しかしだ。きれいな水がない、汚染されたアブラヤシ農園近くの人たちは今も天水やそれらの水を飲んでいる」とメン・チュウ氏は帰りの別れ際でポツンと言った。

今、友人の先住民のバル･ビアン氏が大臣になった。マレーシアも変わりだした。今後を期待したい。

（文･Badman Nishioka）

パーム油発電の現状とこれからのパーム油発電に対するアクション@学習会

6月1日に、エル・おおさか（大阪府立労働センター）で、**第13回パーム油学習会「パーム油発電は本当に”再生可能”なエネルギーなのか？～FITによるバイオマス発電の課題と現状～」**を開催しました。NPO法人「バイオマス産業社会ネットワーク」の理事長・泊みゆきさんをゲストに迎え、パーム油発電が行われている（行われようとしている）地域に住む参加者からも情報提供いただき、53人の参加者と熱心な議論が交わされ盛況でした。

以下、バイオマス産業ネットワークの泊みゆきさんによる講演から抜粋

バイオマスエネルギー利用の概要

日本では、製紙工場で木材パルプを作るときに発生する黒液などが主要なバイオマスエネルギー源であった。近年、パーム油やアブラヤシの房やPKSと呼ばれる種の殻、ペレット、チップ、バイオエタノールといったものが輸入されてきている。バイオマスは歴史上最も利用されてきた自然エネルギーで、2014年時の日本の再エネ種別でも４５％とトップ。バイオマスは熱にも電気にも使用可能という利点があるが、効率がいいのは熱利用である。日本では発電のイメージがあるようだが、本来は熱電併給利用が望ましい。

FITとバイオマス発電

2012年に始まったFIT[1]によって、バイオマスのエネルギー利用が日本国内でも一気に促進された。2017年に急激に増加し、その40%がパーム油（注：PKS含むものを合わせると8割超）だった。2018年12月の経産省データによると、認定容量における一般木材利用が　異常に多く、90%は輸入のバイオマス。その原因は、FITの買取価格が世界と比較してバイオマスに2倍以上の価値を付加してしまったことにある。インドネシアやマレーシアで発電するよりも日本の買取価格が高い。現在、日本のFITで動いているのはほとんどが太陽光発電だが、今後バイオマスが多くなると予想される。標準世帯で年間1,000円程度がFITの賦課金として市民の電気料金に上乗せされていることから、経産省としても制度設計の見直しを図っている。

パーム油の問題

東南アジアの森林破壊の主要要因がパーム油にあるとされ、何度か現地へ行ったが、モノカルチャーの景色に圧倒された。西カリマンタンへ行った際に先住民のアブラヤシ農園開発にかかる土地紛争についてヒアリングし、汚職・買収や先祖からの土地問題と

[1] 固定価格買取制度―再エネ普及のために、再エネで発電した電気を電力会社が一定価格で一定期間買い取ることを、国が約束する制度。電力会社が買い取る費用の一部は電気利用者から賦課金という形で集める

訴訟の問題を聞いた。現在はＮＧＯが支援しており、訴訟になると先住民が勝訴することが多いという。泥炭地開発によるすさまじい量の温室効果ガス排出も問題で、省エネによる削減が全く無意味になるほど。2017年5月のノルウェー政府資料で、ライフサイクルアセスメント（ＬＣＡ）でみると、パーム油は化石燃料の何倍も悪いというレポートが出ている。

元あった森林は切られたままだと再生可能でない。アブラヤシが植えられたとしても、開発時の排出、輸送に使用される化石燃料等、計算の方法によっては石炭よりも温室効果ガス排出が多いというのが世界の共通認識となってきている。

ＥＳＧ投資[2]が、世界的に急速に伸びている。森林減少については、筆頭コモディティティーがパーム油で、続いて大豆、牛肉、木材。特に発電のようにパーム油でなくても良いものにまで使うべきかは気をつけてほしい。また、パーム油にもベターなもの、より悪いものがあることを知るべきである。

ほとんどのアブラヤシの搾油工場で、コストの理由から廃液をラグーン（貯留池）で放置しているが、メタンガス（CO2の21倍の温室効果ガス）が大量排出されている現状がある。多くの搾油工場でメタンガスの回収を行っておらず、ＲＳＰＯ[3]の認証をとった搾油工場でも行っていないケースがある。

経産省の対応とFITバイオマス発電の現状

以上の様な議論もあり、経産省の事業計画策定ガイドラインが2018年4月に改定され、輸入バイオマスでは当該計画が既存用途へ与える影響を最小限にするよう努めること、現地調達事業者等との燃料安定調達協定等を確保することとされた。また、パーム油等バイオマス液体燃料は、ＲＳＰＯのIP(認証された生産現場から最終製品製造段階に至るまで完全に他のパーム油と隔離され、どの生産農園から得られたのかが特定できる認証モデル)・SG(複数の認証された農園から得られた認証パーム油からなり、他の非認証パーム油とは混ぜ合わされることなく、認証油だけで最終製造者まで受け渡される認証モデル)など非認証油と分別管理され、労働の評価などの合法性が証明されていること、食用に供されないことの証明ができるよう考慮することとされた。その結果、認定量は170万kW（年間消費量約300万㌧）と減った。それでもこれまでの4倍のパーム油を輸入する　計算となる。一方、IP・SGは流通量がまだ少量である。

この様にパーム油発電に関しての基準が高められたことで、事業化は事実上困難な状況となり、この問題は解決かと思われた。しかし、企業は基準の引き下げを要望してきた。また、今までパーム油を燃料として大量に購入してきたEUが買ってくれなくなったことで、インドネシアやマレーシアなど生産国の政府からは、各政府主導の認証であるISPOやMSPOも認めるように求めるプレッシャーが日本に向けられている（注：ISPO

---

[2] 従来の財務情報だけでなく、環境（Environment）・社会（Social）・ガバナンス（Governance）要素も考慮した投資

[3] 持続可能なパーム油のための円卓会議。信頼される認証基準の策定とステークホルダーの参加を通じ、持続可能なパーム油の生産と利用を促進することを目指す非営利組織

やMSPOの認証基準はRSPOに比べてゆるい）。NGO側は、パーム油発電が持続可能でないことをきちんと説明して対抗したい。4月18日の第1回バイオマス持続可能ワーキンググループでは、バイオマス燃料の温室効果ガスライフサイクル試算を経産省が出したが、パーム油の温室効果ガス排出係数は天然ガスよりも大きく、これを電気利用者から払われる賦課金で支えることには疑問が残る。実際に委員[4]からも懸念が表明された。

再エネは世界中で価格が急降下しており、日本の電気料金も21円/kW程で、輸入を前提とする再エネはコストを下げられないだろう。国産材を使えばお金は地域に落ちるが、海外から購入すればお金が外へ出て行って、化石燃料と構造が変わらないこととなる。

パーム油発電による間接影響とレピュテーション（評判）リスク

ＲＳＰＯ認証をとっていたパーム油でも、需要が拡大すれば新たな熱帯林開発のプレッシャーがかかることは確実であり、国連でもずいぶん前からこの影響が問題視されている。

パーム油発電でFITとして認定されたのは、2018年3月末時点で170万ｋWほど。現在稼働が確認されているのは、エナリス（37MW/6万㌧）、神栖パワープラント（39MW/6万㌧）、三恵エナジー（2MW/3千㌧）の3件。大手旅行会社のH.I.S.の子会社が、角田市に41ＭWを建設中である。開発時の土地転換などの間接影響を考慮すると、パーム油の温室効果ガス排出係数は化石燃料より高くなる。たとえRSPO認証を得たようなパーム油であっても、新たな需要に向けられることで、従来の需要を満たすための新規開発圧力が生じる。そのためEUはパーム油の燃料利用の段階的廃止を決定している。東京のNGOメンバーがH.I.S.の社長と話した時に、RSPOの森林認証の一番厳しいものを採用すると宣言されたが、仮にIP・SGのパーム油が調達できたとしても、レピュテーション（評判）リスクを負う可能性が高いだろう。レノバ、SBエナジーなどは、そのリスクを考慮してパーム油発電計画を撤回した。H.I.S.が挫折すればパーム油発電の波が止まる可能性が高く、逆にこれが上手くいってしまうと走り出してしまうかもしれない。

バイオマスの持続可能性

Ｇ7がきっかけでできたＧＢＥＰの指標では、バイオマスの持続可能性とは、環境・社会・経済・エネルギー保障を指す。環境ではライフサイクルコストや水、大気、土壌の問題。社会分野で重要なのは土地収奪問題（Land grabbing）で、土地所有があいまいなところを企業は狙うが、現地政府にとっても都合が良いので容認されてしまう。経済では生産性、効率、エネルギー収支。日本ではエタノールをガソリンに混ぜている。バイオマスエネルギーでは、かつてトウモロコシの価格が上昇し、貧困国で子どもたちが飢えるといった問題を引き起こしたので気を付けなくてはいけない。日本では木材を違法伐採でないものにという基準はあるが、温室効果ガスに関わる基準がなかったことも大きな問題の一つである。温室効果ガスを考慮するとパーム油はＦＩＴ対象とすべきでない。地域の廃棄物や残材を、熱利用や熱電併給に使うのが王道である。

[4] 環境法教授や消費者協会、自然エネルギーのコンサルなどこの問題に理解のあるメンバーも比較的多い

各地域のパーム油発電の状況

福知山のパーム油発電について

京都府福知山市でパーム油発電による騒音や悪臭被害を訴えている被害者の会を代表して、三谷義臣さんから情報提供をいただいた。福知山では、地域でレジャー施設等を展開する三恵観光が、パチンコ店のあった空き地を利用して「三恵福知山バイオマス発電所」を2017年6月に稼働した。本発電所は2ＭＷの発電容量で、2019年6月20日付けの京都新聞によると、約2600世帯分の発電が可能でFITとして電力会社に売電している。

三谷さんによれば、2016年11月に突然の建設通告が会社から区長にあった。12月の住民説明会では住民からの質問に十分な返答がなされなかった。2017年2月の住民説明会では、三恵側は50デシベル以下の騒音対策の約束と「パーム油特有の軽く甘い感じの香りはあるかも知れないが問題にならないレベルと判断している」との意見表明をしていたが、実際には油が焦げたような何とも表現し難い悪臭が漂っており、24時間音が鳴り響いて寝られない日々だという。京都新聞では「臭いが気になって体調が優れない。小さな子どももおり、心配で窓も開けられない」と訴える主婦の声も紹介されている。

2019年2月20日には、発電燃料のパーム油7000リットルが漏れて下の住宅街に流出する事故が発生した。油は発電所の西に隣接する住宅地の下水管１００メートル以上と、周辺の側溝などに流入し、白く凝固したまま流れなくなった（2019年2月23日京都新聞記事）。しかし、社長は謝罪に来なかったという。

2019年4月に近隣住民による騒音悪臭問題対策推進会議が発足、4月23日正式に「地元自治会として発電所側に、夜間の稼働停止やさらなる騒音対策を求める要望書」を提出。現在は、近隣の家用のぼり旗の配布や議員・マスコミへの情報提供を行っている。

舞鶴で計画されているパーム油発電

京都府舞鶴市にお住まいで、地球温暖化防止活動推進員でもある大槻賢孝さんからは、舞鶴港で現在進んでいるパーム油発電所建設計画についての情報提供があった。京都府の港湾計画の一部であり、京都府環境部エネルギー政策課の資料によると、京都舞鶴港スマート・エコ・エネルギーマスタープランの一部としてパーム油発電を進めようとしている模様。発電容量は約66MWで、一般家庭の約12万世帯に相当する。資料では舞鶴グリーンイニシアティブによる「環境にやさしい」エネルギーと謳っており、NGO側からの適切な情報提供が必要だと思われる。港湾審議会でも一部の議員からパーム油利用の是非を問う質問が出されたが、「ＲＳＰＯ認証だからいい」という返答で終わったようだ。

燃料供給元は、世界でも最大級のアブラヤシ農園を所有するゴールデン・アグリ社で、製紙業で有名なＡＰＰを含むシナルマス・グループの一員である。スケジュールでは、2019年8月工事開始、2021年10月運転開始とある[5]。こちらも議員や学者、マスコミとの意見交換・情報提供を現在行っている最中である。

---

[5] その後の最新情報では、出資者がAMP社に変わるために工事開始が一年遅れ、シナルマス社は燃料供給事業者として留まるそう

新会員の声

はじめまして！先日入会しました、合同会社LIMONE(リモーネ)代表の緒方（29）と申します。
大学院のときボルネオ保全トラスト・ジャパンのインターンシップ生としてボルネオ島に行って以来、ボルネオの野生動物を守るために自分が出来ることを日々模索しています。
以前からウータンは存じておりましたが、イベントに参加させて頂いた際に運営されている皆さまと直接お会いし、私も何か力になれることはないかと思いすぐに入会いたしました。普段は関東におりますが、今後もウータンの皆さまと仲良くさせて頂ければとても嬉しいです。どうぞよろしくお願いします！

ボルネオでの経験をもとに、私が現在やっていることをご紹介させてください

✓エシカルな商品を実際に使って紹介するメディアサイト
”Ethical Gift（エシカルギフト）”

※Ethical(エシカル)とは、直訳すると「倫理的な」という意味で、最近では社会や環境に配慮した消費の考え方を指します。

✓世界初！オランウータンを守る『オリジナルエコーヒーカップ』の制作・販売

7月17日までクラウドファンディングにて応援してくださる方を大募集中です。

2018年度の活動振返り＆2019年度の計画案

6月9日に実施された総会の中で、シンプルな3つの項目にまとめ直したミッションに沿って議論された活動案をご紹介します。（☆の項目は今後取組み予定、または検討予定の活動）

ミッション①

2030年までに森林破壊ゼロをめざします。森林破壊につながる開発を抑止するために国内外で活動するNGOなどの世界の仲間と共に調査し行動します。

・パーム油発電反対キャンペーン（2017年～）
☆東カリマンタン州ラバナン演習林等の開発問題
☆スラウェシ島での違法材調査
☆自治体キャンペーン
（☆スマトラ島のタパヌリオランウータン生息地のダム建設問題）

ミッション②

原生種による失われた森林の回復と地域住民主体による残された森林の保全を国内外のNGOや現地の人びとと協力して実現します。

・タンジュン・プティンでの在来種の苗づくりと植林（2008年～FNPFと協働、2017年～村のセコニャール青年団との協働）※村＝タンジュン・ハラパン村
・タンジュン・プティンでのエコツアー（2012年～／村の水の農薬検査を含む）
・タンジュン・プティンでの森林火災対策（2015年～／地図情報システムを含む）
・スンガイ・プトゥリでの熱帯泥炭地保全と再生にむけた調査（2017年～）
☆東カリマンタン州ムラサ村でのCAN Borneoとの協働によるアグロフォレストリー

ミッション③

気候変動を食い止め生物多様性を守るために、原生林や保全価値の高い森林及び熱帯泥炭地等の重要性を国内外に発信します。また、世界で活動する仲間とつながり、問題解決のために行動する人を増やします。

・会報誌作成（年4回）、パーム油学習会（年3～4回）、海外ゲスト講演会（年2回程度）
・講師派遣（大学など学校を中心に他NGOや企業向けも含む）（20回程度／年）
・ブース出展（ワン・ワールド・フェスティバル、スタディツアー説明会など）
・熱帯林保全NGO共同で「森のある惑星」ウェブサイト運営と毎月のメッセージ発信
・ドキュメンタリー制作　中井信介監督「森の守り人」
・Gochisoへの参加（ファンドレイジング）
・SNSでの発信・啓発（#palmoil_changeを含む）、メディア発信（新聞等への取材対応）
・国内外のシンポジウム等参加　※情報収集
☆「世界の森林ニュース」をメルマガで発信、Websiteで気候変動に関する情報発信
☆リーフレット作成
☆生協店舗等での啓発活動（油を使わないお惣菜等）、パーム油使用企業等への働きかけ
☆パーム油代替の一つとして国産菜種油等の手づくりワークショップ等イベント
☆ベジタリアン、ビーガンなどウータンが取扱う問題に関心のある層の巻き込み・協働

2018年度決算 (2018年4月～2019年3月)

(単位:円)

項目	金額	備考
(1)収入		
一般繰越金	2,673,995	
会費	320,000	
寄付	695,637	含イベント会場寄付、Gochiso寄付
インドネシア消防支援金	10,000	
物販収益	154,500	キーホルダー、国産ポテチ等
講演等業務委託収益	142,350	ツアー及び講師派遣収入
熱帯泥炭地保全・再生及び啓発」事業	2,854,000	地球環境基金より助成
同上（未収金）	1,646,000	同上
「火災に強い森作り」と「消防体制の共同構築」モデルづくり事業	1,800,000	公益信託地球環境日本基金より助成
雑収入	51,733	含「地方の時代映像祭」賞金5万円
(1)収入計	**10,348,215**	
(2)支出		
委託報酬	1,840,000	
コーディネート料(海外での調査・視察等)	50,510	一部に旅費交通費含む
諸謝金	483,990	
植林活動費	962,497	含インフォメーションセンター建設費
消防活動費	109,951	
映像制作費	870,000	
旅費交通費(国内)	489,397	
旅費交通費(海外)	2,015,051	
賃借料	144,000	事務所家賃
会場賃借料	83,840	
諸会費	11,000	
図書費	880	
販売物品仕入代	91,857	キーホルダー、国産ポテチ購入
広告宣伝費	33,853	Facebook広告費
会報誌制作費	193,320	
郵送費	151,164	
通信費	15,282	
印刷費	85,826	インク・用紙購入費含む
消耗品費	92,554	写真用国産材額縁代含む
支払手数料	17,823	
雑費	3,863	会計引継ぎにって生じた残高不足
(2)支出計	**7,746,658**	
(3)繰越金	**2,601,557**	

2019年度予算 (2019年4月～2020年3月)

(単位:円)

項目	金額	備考
(1)収入		
一般繰越金	2,601,557	含インドネシア消防支援金残金8,049円
会費	400,000	前受金28,000円含む
寄付	500,000	
物販収益	100,000	
講演等業務委託収益	150,000	
「熱帯泥炭地保全・再生及び啓発」事業	4,500,000	地球環境基金(確定)
「村人主体の在来種の森づくり」事業	1,500,000	積水ハウスマッチングプログラム助成
「インドネシア違法伐採・密輸材調査」事業	495,000	パタゴニア環境助成金(申請予定)
広報媒体の制作による支援者拡大事業	200,000	Gift-Challenge助成(申請中)
(1)収入計	**10,446,557**	
(2)支出		
委託報酬(事務作業等の業務委託)	1,590,000	
コーディネート料(海外での調査・視察等)	190,000	
諸謝金	276,000	
植林事業費	1,530,000	
消防事業費	10,000	
映像制作事業費	300,000	
旅費交通費(国内)	462,000	
旅費交通費(海外)	1,793,000	
賃借料(事務所家賃)	144,000	
会場賃借料(講演会等)	110,000	
諸会費	55,000	
図書費	30,000	
販売物品仕入代	90,000	
広告宣伝費	510,000	インドネシア開催セミナー協賛前払金、リーフレット及びロゴのデザイン料
会報誌制作費	200,000	
郵送費	170,000	
通信費	20,000	
印刷費	326,000	熱帯泥炭地啓発用冊子及びリーフレット、ヒストリー ブックの印刷費含む
消耗品	50,000	
支払手数料	20,000	
(2)支出計	**7,876,000**	
(3)繰越金	**2,570,557**	

2019年6月 Yucco

タンジュン・プティンの青年団や村について

今年2月に神前先生とイッシーと訪れたタンジュン・ハラパン村のご報告をお届けします。元FNPF（ウータンが長年共に活動しているローカルNGO）のアドゥを中心に活動が活発化している青年団の様子と、彼らの目の前にある問題についてご紹介します。

青年団の植林

私達が現地に到着した日、村の上流側にあるポンドック・アンブン(Pondok Ambung)という場所で、アドゥ達はF.C.マニスとの協働による2haの植林（3人×3日間）を完了したところでした。疲労困憊の中、快くウータンの植林[6]エリアへ案内してくれました。

ポンドック・アンブンはタンジュン・プティン国立公園管理下で、2002年に焼失したエリアです。森は全体的に樹高が低く、展望タワーにも見える立派な櫓が立って野生生物調査に使用されているといいます。ウータンの西岡代表が依頼した火災に強いと思われる10種100本を植林してたくましく育っている「バッドマン区画」の横に、今回植林したF.Cマニスのエリアが隣接していました。そこを更に奥へ進むと、ウータンの5haエリアが現れました。雑草に覆われた木々を指しながら、そろそろ下草を刈る時期だと説明するアドゥ。3カ月ごと3度のメンテナンスを基本にしたいようです。森を歩きながら、このポンドック・アンブンと青年団の関係について伺いました。FNPFなどのNGOは国立公園から依頼を受けて植林を行う際にMoU（了解覚書）を取り交わしていますが、青年団はNGOではなく村行政の傘下にある組織のため、村行政と国立公園の間でPKS（Perjanjian Kerja Sama:協力協定）を結び、その枠内で青年団が活動するかたちをとっています。言葉の端々に、まだ信用の無い新しい団体として、国立公園に掛け合って仕事を取ってきたアドゥの苦労が滲み出ているように感じました。PKSを作成する中で国立公園との擦り合わせがなされ、ポンドック・アンブンでは合計13haの植林が必要かつ可能であるということになり、内7haの植林を終えた青年団。残る植林はパンカランブン（Pangkalan Bun）の町の旅行会社が協力意向を示しているそうですがまだ定かでないようです。

6 ウータン会報誌131号「デビューしたての現場監督たちのセキニンとセイチョウ」を参照

水草問題

青年団と国立公園との間で植林候補地として上がっている他のエリアとしてコレ（Kole）という違法鉱山開発跡地があります。49haの荒廃地を植生回復させるため、今後2年半を掛けて植林を完了させたいという話が進んでいます。コレへはポンドック・アンブンから更に舟で川を上って向かうのですが、鉱山開発による水質の富栄養化によってアマゾンからの外来種ホテイアオイという水草が大量発生。川の水面を覆い尽くし舟が通れないという問題が発生しています。植林適期である雨季になると繁茂するこの水草の問題を私たちも実際に確かめました。一度踏み込むと出るのも困難になるほどの水草、かき分けることすら出来ないお手上げ状態です。2018年9〜10月には国立公園を中心にウータンの活動地であるタンジュン・ハラパン村や青年団、鉱山開発エリアの住民も協力して2カ月掛けて駆除したそうです。しかし2月になった今、再びアクセスできなくなっています。

村の水問題

ウータンのエコツアーにも何度もご参加下さっているマコさんからの問題提起をきっかけに、マコさん個人として多大なご協力を頂き村の水を調査しました。村の北側にあるオイルパーム・プランテーションと村の境で水路の水を採取し、帰国後日本の検査機関で336種の農薬について分析しました。結果はいずれも検出されず！村人が毎日マンディ（水浴び）や歯磨き、洗濯に使っている水について、科学的に調査できたことはとても意義のあることだと思います。また水の濁りについては、雨季で満ち潮の時間帯だったため水位が高く透明度も30cm以上はありそうな状況で、エコツアーの時期と比較して随分綺麗な印象でした。アドゥやドニに過去と比較しながらヒアリングしてみると、水質はちょうどBLP社が村付近でプランテーション開発を始めた2001年頃から、農薬と化学肥料の影響と推測される異臭や皮膚の痒みを感じて魚が大量死するようになり、2008〜9年が酷い状況だったこと、その後現在に至るまで水質は徐々に改善していることが二人の話から分かりました。

村の牛問題

青年団が一番問題視している村の問題、それは牛の問題です。村の中に植林した木々が牛に食べられることはもちろん、事態は私たちが思っていたよりも深刻かもしれません。青年団メンバーたちも飼い主や村長に何度も申し入れていますが、全く対策がなされません。牛は、2004〜5年の洪水後に村の北側の耕作放棄地で村の裕福な3〜4人が放牧し始めてから、今では深刻な食害と糞の問題として村人を悩ませています。

ボルネオの村の青年たちと格闘した10日間

「…この飛行機、何人乗るんや？？」

「え〜っと、一番後ろの列が50番やろ。一列あたり9席やから450人。クルーも入れて500人はいかへんけど…。あっ、村の人口ってそんくらいやんな？この飛行機、村いっこ全部乗せれるで!!（笑）」

ボルネオ島（インドネシア・カリマンタン島）から村の青年2人を連れて日本に向かう飛行機に乗り込もうとしたその時、爆笑してしまった私。これまでも何度か村人を日本まで引率し、ほとんど村を出たことがなく何もかもが初体験な人もいたが、人の多さに絶句するというツボは想像できなかった。こういう体験は、ホントに毎回発見と驚きに溢れている。私も普段当たり前なことが”ぶっ飛ぶ”経験ばかりで、おもしろい。

…これは、ウータンがカリマンタンで一緒に活動しているタンジュン・ハラパン村の青年団[7]メンバーのドニとフェブリが今年3月末に来日した時のお話。以下、10日間の日本滞在の記録をお届けします。

つながりと熱意に支えられた講演会

大阪・東京では、「村の青年たちが語る！ボルネオ島の火災最前線とこれからの森づくり」と題して講演会を行い、それぞれ35人と56人が参加して下さいました。青年団は2017年に立ち上がった20〜30代を中心とした村人の集まりで、環境保全・環境教育・住民支援をビジョンに掲げて活動しています。現在、村や隣接する国立公園内での在来種を中心とした植林や苗木づくりのほか、ウータンとの協働でエコツアーの実施もしています。今回の講演では、中心メンバーであるドニとフェブリが、青年団の活動について紹介するほか、自身が青年団に加わったきっかけにもつながるライフ・ヒストリーを語るなど、村人目線での環境保全や村おこしについて聞きました。

大阪では、エコツアーで2人と顔見知りになった人たちが駆けつけてくれた以外に、新聞での告知のおかげなのか、初めましての方もちらほら。みなさん質問が絶えず、「活動の財源は？」や「どんな支援が必要？」といった突っ込んだことまで、真剣かつ親身に考えて下さりながら熱い議論が繰り広げられました。また、同世代の学生さんも2人の発表を聞いて「勇気づけられた」などの感想をもってくれ、企画する立場としても元気をもらう会となりました。

東京の講演会は、年末に中高生スタディツアー[8]で協働したボルネオ保全学生グループ（SGBC）と一緒に企画。ツアーに参加した学生さんや先生たちとの対談の中で、「ツアーで見たこと・感じたこと」について話し合いました。この日は、対談に登壇してくれたメンバー以外にも、司会や受付など会の全体を支える立場として多くの中高生

---

7 青年団については、会報誌127、129、131、132号で紹介しています。

8 詳しくは前号の会報誌（132号）5〜7ページ「いつもの村の魅力、再発見！」を参照。

たちが活躍してくれました。あまりにみんなが頼もしく、これからもこのような繋がりから一緒に色んなアクションができたらいいな！と妄想が膨らみました。準備から当日運営までご協力下さった先生方・学生さんたちには、感謝の気持ちでいっぱいです！

懇親会はまるで同窓会！@大阪

大阪・東京ともにツアーで村を訪れたメンバーが多く参加し、ゲスト・参加者ともに再開＆交流を心から楽しんでもらえました♪

不安＆本気!! 初めてのプレゼン舞台裏

ドニとフェブリは、タンジュン・ハラパン村から来日する初めての青年ではありません。これまで会報誌の紙面の関係で多くは語れていませんでしたが、ちょうど1年前には地元NGO・FNPFで働くイサム、11月には2人と同じ青年団からイラを呼びました。個人的には長い／濃い付き合いの兄貴分／弟分のような存在で、海外渡航はおろか村からほとんど出たことのない彼らが日本に来るにあたり、カリマンタンに前入りして一緒に来日したり、関西での滞在中は私の家でホームステイしてもらったりしました。

その一つ一つが私にとっては（おそらく他のみんなにとっても）特別なイベントですが、特にプレゼンの準備に関しては、ドニとフェブリの2人は格別だと感じています。先の2人に比べて10歳ほども年下だからなのか、それとも理想が高いためか、来日前から「いいプレゼンがしたいから指導して」と頻繁にせがんできて、日本でも発表の回数を重ねる毎に改善に向けて振返りました。その熱意は、時に私がついていけないほど。特に、家に迎え入れて、春になったにも関わらず「寒い、寒い」が止まらない2人の暖をとる知恵を絞ったり、村人の舌に合う料理を考えたりしていると、「母ちゃん、また忙しそうやなぁ～」とからかわれてしまう羽目に…（ギリギリ同じ20代やのに！）2人は帰国してもなお、私のことを「Uma（村の言葉でお母さん）」と呼びます（笑）。

また、どんなに親しい間柄でもお互いのプライドに一段の配慮をするドニとフェブリに対して、2人の態度を見ながら話を進めたり、一人一人に合わせた対応をするのは、私にとって大きなチャレンジとなりました。また、イサムやイラは年の功なのか一旦人前に出ると比較的堂々と喋る一方、まだ若くて自信の足りないドニとフェブリには繰り返しの練習が必要でした。そんなこんなで、オフの日でも気が抜けないし疲れがとれない…といった苦労を重ねはしましたが、訪日終盤には2人とも質疑応答でも迷いなく答えるようになっていました。母ちゃん、嬉しいよ！

カリマンタン風の日本手料理を食べるドニとフェブリ

つながる、つづく、日本とボルネオの草の根交流

講演会のオフの日には、京都などへ観光に行きエコツアー参加者やドニ・フェブリを知る人たちと交流したり、日本の色んな側面を見てもらったりしました。でも、ただ遊んだだけではありません。例えば大阪では、タンジュン・プティンで観光ガイドをするフェブリと出会った高校の先生が、国際交流部の生徒さんたちと交流しながらボルネオのことを話してほしいというリクエストがあったり、関東では、ウータンともタンジュン・ハラパン村ともお付き合いの長いマニス・ファンクラブの拠点である神奈川県三浦郡葉山町で、代表の丸山さんとつながっている「環境や食に携わる方々」と集まって、森を守ったり村を良くするための方法についてディスカッションしました。

また、大阪では「菜の花プロジェクトみのお」の有機農園での作業にお邪魔し、ウータンのアドバイザーでもある神前先生に畑を案内していただいたりメンバーさんと一緒に”畑の恵ランチ”を食べながら交流したり、関東ではSGBC（上述）を運営する傍ら地元で里山活動にも取り組む学校の先生や生徒さんたちと一緒に、フィールドの手入れ作業をしながら活動について学んだりもしました。さらには、村で青年団が建設中の「環境・文化について学び・議論する集い場」としてのインフォメーション・センターの参考にすべく、京都にある環境学習活動を行う市民グループ・フィールドソサイエティーが運営する「法然院森のセンター」を訪れ、「楽しく森について学べる仕掛け」の実例を学びました。

ウータンでは「日本とボルネオをつなぐ」という目線から、これからも海外ゲストとの交流や相互学習といった機会を大事にして活動していきたいと思います。一緒に何かしたいな！というアイディア・想いを持つ方がいらっしゃれば、ぜひお声がけ下さい！

高校生との交流活動

法然院森のセンターにて

葉山町でのディスカッション

里山活動中に落ち葉堆肥を見学

ノルウェーが熱帯林破壊企業への投資を引き揚げ
世界最大のノルウェー政府グローバル投資ファンドは，他の企業や社会に対しリスクを与え長期的に持続可能でないとして30企業に対する投資を引き揚げた。Sime　Darby等4つのプランテーション企業は東南アジアや南米等での熱帯林破壊の原因となる作物生産に関わるとの理由。[Mongabay　3月1日]

ブラジルの森林法改定でアマゾンの保護林が危機
2012年の森林法改正でアマゾン諸州は最低65％を保護区または先住民居留地と定められたが，昨年の再変更命令で農村部民有地の自然植生破壊が増加し1500万haに達する。アグリビジネスの利益優先の現政権下では法改正にてアマゾンの森林破壊は抑えられないとの研究結果。[Mongabay　3月4日]

欧州議会がベトナムとの木材合法協定を承認
欧州議会は昨年11月に調印したベトナムとの木材合法性保証システム（FLEGT）の自主的二国間貿易協定（VPA）を承認。EUへの最大の家具輸出国ベトナムは，コンゴ民主共和国から違法材を大量に輸入し加工して再輸出し，サプライチェーンの合法性は担保できないとNGO批判。[Mongabay　3月11日]

オランウータン保護に役立つ森林火災に強い在来種
IUCNはボルネオ・オランウータン最大の生息地の東カリマンタン州クタイ国立公園で250種の在来種を分析し，オランウータンの食料となる7樹種と火災に強い2樹種を特定した。これらの在来種を火災の危険の高い地域のバッファーゾーンに植えることでオランウータン保護に役立つ。[Mongabay　3月15日]

企業は2020年森林減少ゼロ公約を達成できない
Global Canopyは森林破壊リスクの高い一次産品（牛肉，パーム油，大豆，木材）のサプライチェーン企業350社と金融機関150社を調査し，企業が自ら課した2020年までに熱帯林破壊を終わらせるというzero deforestation公約は達成できないとの報告書Forest 500を公表した。[Mongabay　3月21日]

天然林はプランテーションの40倍の炭素貯留能力
天然林の炭素貯留能力は，産業造林やアグロフォレストリーの40倍との分析結果を発表。ブラジルやインドネシアは産業造林で森林面積を拡大しており，熱帯・亜熱帯諸国の森林回復の66％は作物の植栽を含むとの結果。[Mongabay　4月9日]

EUの食料消費の6分の1が熱帯林破壊に結びつく
EUでの平均的な食事のカーボンフットプリントの6分の1が，直接的に熱帯林破壊と結びつくとのスウェーデンの大学の研究結果。先進国は森林減少を引き起こす産品の輸入で森林破壊をしているとの批判が高まり，EUはこうした輸入産品問題に取り組むイニシアチブを準備中。[Mongabay　4月11日]

ミャンマーのマングローブを脅かす違法な木炭取引
ミャンマー南部のマングローブ林の急激な消失は漁業や地域住民の脅威となっている。木炭の形でのタイへの違法輸出が最大の要因で，住民自身による調理燃料としての違法伐採も後を絶たない。もみ殻利用のレンガを代替燃料として普及させる効果が期待されている。[Mongabay　4月18日ほか]

泥炭地規制は保護地域外の森林破壊を助長する懸念
インドネシア政府による2016年からの泥炭地開発凍結政策は，世界最大の製紙業2社の原料調達を25～30％減少させ，保護地域以外の森林に調達先を求め森林破壊を助長する可能性があるとNGOが指摘。[Mongabay　4月22日]

人為的影響で100万種が絶滅危機と国連報告書
国連の「生物多様性および生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム」（IPBES）が来年公表する1800ページにわたる報告書の政策立案者向け概要が発表され，種の減少ペースが過去1000万年間で数十～数百倍に上昇し，50～100万種の生物が絶滅の危機に直面する恐れがあり，多くは数十年以内に危機的状況に晒される。[AFP 4月24日他]

2018年の世界の森林減少は2001年以降4位の高さ
Global Forest Watchによる衛星画像解析での2018年の森林減少は1200万haで，毎分サッカー場30個分の熱帯林が失われた。これは2001年以降4位の高さで，原生林消失は加速しベルギーに匹敵する面積が失われ，コロンビア，マダガスカル，ガーナなどで減少が顕著に。[Reuters, Mongabay　4月25日]

インドネシア東部原生林で違法材を多数押収
インドネシア産木材の合法性証明システムSVLKの信頼性が疑問視。マルク諸島やパプアなど東部の原生林地域での違法材の押収が増加。商業伐採禁止地域での農民や先住民を利用した方法での伐採が抜け穴に。[Mongabay　5月16日]

ソロモン諸島で昨年から原生林の伐採急増
PNGに次ぐ中国への丸太輸出国ソロモン諸島では昨年から原生林の伐採が急増し，持続可能な水準の20倍のペースで破壊が続くとGlobal　Witnessが報告。コミュニティでの森林の破壊に住民は長年抗議してきたが，政府官僚の違法伐採容認は改まらず衛星画像で新規違法伐採判明。[Mongabay　5月17日]

アマゾンの森林減少要因は国ごとに異なるとの研究
アマゾン地域での乱開発による森林減少は記録的水準に達しているが，国ごとに要因は異なり共通点は適切な監視資源と環境規制執行の欠如との研究結果。ブラジルは牧場と大豆，ペルーは違法な金採掘と伐採，コロンビアでは内戦終結後の権力の空白，ボリビアは牧場と大豆，エクアドルはアブラヤシが森林減少の推進力となっている。[Mongabay　5月23日]

イノさんの気まぐれ読書案内

『おいしいノンオイル生活レシピブック』

浜内千波　扶桑社　2011年

第二次世界大戦で日本に油を押さえられた米国は、油を国内で大増産。終戦で不要になった油を、日本人に買わせるためキャンペーンをはった。
それまで、日々の料理に油をあまり使わなかった日本の食卓は「油まみれ」になった…。

（2017.7.29　第7回パーム油学習会「油まみれな食生活への政治経済史ーパーム油など油脂の消費拡大を促した構造的変遷」平賀緑さん講演より）

パーム油に罪はないがこれ以上の熱帯林破壊は困る。
国産米油や遺伝子組み換えでない菜種油もいいが、
料理に使う油を減らすのもいいかも。
コレステロールも気になる。洗剤も節約できて、水も汚さない。

というわけで、油を使わない料理をいくつか試してみた。
卵焼きは半熟になったら、鍋を濡れぶきんに置いて冷やすとくっつかない。
ラタトゥイユを作ってみた。料理の腕はともかく美味しかった。
私は、ポテトサラダにコープ「米油を使ったマヨネーズ」を試している。

オランウータンの森づくり植林を支援しました！

昨年末、オランウータンの保護・リハビリやその生息地を守るための現場調査・キャンペーンに取組むインドネシアNGOのCOP（オランウータン保護センター）からの要請を受けて、リハビリ後のオランウータンと周辺住民の共生を目指した森づくりのための果樹植林を支援しました。また、今年3月には現場状況の確認や今後の活動検討のために、ウータンメンバーが現場を訪問しました。(会報誌の前号「東カリマンタン報告」を参照)
今回、急な依頼に対して助成金の当てもないなか、支援の踏み切りには慎重な検討を重ねましたが、みなさまから日頃いただいている会費・寄付をこのようなかたちで役立てられたことを嬉しく思っています。ありがとうございます！

森の中でのホームステイ・ボルネオ島エコツアー

日程：8/25（日）～31（土）

旅行代金：189,000円

（関西空港以外からのご出発は要ご相談）

＊お申込み・お問合せ先＊

（株）マイチケット

06-4869-3444/info@myticket.com

お申込み〆切：7/10（水）

まずはお問い合わせを！

■ 旅行日程

※ボルネオ島でのスケジュールは、天気など現地の状況によって若干の変更が生じることもございます。

	日付	旅程/プログラム	宿泊地	食事
1	8月25日（日）	8:00 関西空港集合 10:00 出発、香港経由でジャカルタへ 19:40 ジャカルタ到着 空港内のホテルへ移動	ホテル（ジャカルタ）	昼* 夜*
2	8月26日（月）	ホテルから空港へ 06:10 ジャカルタ出発 07:45 パンカランブン(ボルネオ島)到着 船でタンジュン・プティン国立公園へ移動し、オランウータン保護施設（キャンプ・リーキー）の見学	ホームステイ（タンジュン・ハラパン村）	朝 昼 夕
3	8月27日（火）	地元NGOの森林再生地（ジュルンブン）へ移動 ジュルンブンや周辺でアブラヤシ・プランテーション、泥炭地、森林火災跡地、有機農業や森林農法の見学	ホームステイ（タンジュン・ハラパン村）	朝 昼 夕
4	8月28日（水）	国立公園へのトレッキングと植林体験 村での伝統工芸づくり体験	ホームステイ（タンジュン・ハラパン村）	朝 昼 夕
5	8月29日（木）	村の子ども達との環境教育 植林など環境保全に取り組む村の青年団との交流	ホームステイ（タンジュン・ハラパン村）	朝 昼 夕
6	8月30日（金）	午前中 タンジュン・ハラパン村出発、船でクマイ港へ移動 クマイにて市場の散策と昼食 15:20 パンカランブン出発 16:45 ジャカルタ到着、空港内のホテルへ移動	ホテル（ジャカルタ）	朝 昼
7	8月31日（土）	6:00 空港へ移動 8:15 ジャカルタ出発、香港経由で大阪へ 21:25 関西空港到着、解散	—	朝 昼* 夜*

※食事（*印）の部分は機内食です。

※その他の費用（4月1日現在）
燃油特別付加運賃：7,400円、関空使用料：3,040円、国際観光旅客税：1,000円、現地空港税：5,300円程度

■利用航空会社：キャセイパシフィック航空
■利用予定ホテル：ジャカルタエアポートホテル又は同等クラス
■最少催行人員：8名
■添乗員：同行しません。現地に詳しいウータンのスタッフが関西空港から同行します
■申込期限：7月10日（水）　※期限を過ぎてからのお申込はご相談下さい。

ウータン・森と生活を考える会

【OFFICE】〒530-0015 大阪市北区中崎西 1-6-36
サクラビル新館 308
「関西市民連合」気付
Tel.06-6372-1561
mail：contact-hutan@hutangroup.org
http://www.hutangroup.org

【一部】300 円【年会費】4000 円

【郵便振替】00930-4-3880

◉購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。

◉ウータン定例会は、火曜日 7:00pm より「関西市民連合」事務所にておこなっております。